

21世紀「環境の時代」へ向けて

岡山大学副学長

環境保全協議会座長

青 山 勳（資源生物科学研究所教授）

21世紀を称して様々なキャッチフレーズが飛び交っている。その一つに「環境の時代」がある。20世紀は「科学の時代」で、科学技術の進展が人類の繁栄と福祉に大きな貢献を果たしてきたが、その裏側では、世界人口の増加、食糧、資源、エネルギーそして地球環境問題が激化し、地球の危機と人類の生存に関わる地球史的、人類史的課題がますます深刻なものとなりつつある。一方では、社会構造、経済構造の変化が21世紀を「混沌の時代」へと導きつつあるように思われる。そしてアメリカの戦略的と思えるような、あらゆる領域におけるグローバリゼーションと競争関係が大量高速輸送システムと高度情報化システムの発展、IT（情報技術）革命と相まって一層進められていく。この21世紀が「環境の時代」と称せられることと「グローバリゼーション」や「IT革命」との概念はまだ共通な立場からの議論は十分にはなされていない。前者はどちらかという悲観的な状況が描かれ、後者は極めて楽観的に、前向きな姿勢で論じられているように感じる。しかし1つの接点がある。それは環境保全対策として、環境マネジメントシステムに関する国際標準化機構（ISO）による国際規格ISO14000シリーズが今国内においても広く浸透ししつつあることである。ISO認証の取得が、残念ではあるが、環境対策におけるグローバリゼーションの現れであると言えるのかも知れない。一方では、地球温暖化問題等は環境汚染のグローバリゼーションの1つであるが、「南北問題」が問題解決を引き延ばし、遅らせている。21世紀の中・後期の未来に対して、今私たちがなすべき課題は極めて明確である。しかし社会システムと人間の環境に対する倫理感の未成熟さがなすべき事をなす事さへ困難にしているという実態がある。「環境倫理」という研究領域が生み出されてきた背景でもあろう。

地球環境問題に代表される様々な環境問題の多くは経済性を無視すれば、現在の技術で対応できることが多いと考えている。しかし先述の社会システムの未成熟さやこの200年間の科学（人文・社会科学を含む）の在り方を考えると、環境問題は単に技術だけではとうてい解決し得ない困難な問題・課題を抱えており、環境倫理学の台頭などを考えると、今求められているのは、科学の価値観の変革、科学のパラダイムシフトではないかと思う。

地球規模の環境問題は優れて地域の環境問題でもあることを強く認識すべきであろう。さて今岡山大学は「自然と人間の共生」を全学共通スローガンとして掲げ、21世紀に向かおうとしている。環境管理センターにはスローガンを実践する部隊の一翼を担ってもらいたい。本誌「環境制御」は人文・社会学系からの投稿も含め、その重要な情報発信源となることを期待している。